

書香

1983. 12. 1

No. 4

図書館への期待

教育学部長 大澤 欽 治

今日、社会のコンピュータ化が進み、私共の周囲を見渡せば情報の渦が氾濫している。その良し悪しはともかくとして、それでは情報の貯蔵庫たる図書館の状況はどうだろう。本学の図書館にも電算化のための委員会が設置され、具体的方策の検討が続けられていると聞いている。

そこで、図書館の電算化とはいったいどのようなことなのだろうか。私のような素人にはそのイメージはなかなか把握しきれない。コンピュータに関しては、教育実践研究指導センターが設置されたのを機に、いさゝか学ぶ機会を得た位である

さて、図書館には膨大な数の蔵書があり、毎日多数の教官、学生が借り出しをしているが、その借出返却記録の整理は、さぞ大変な業務であろう。また新しく購入される図書の整理も相当に繁雑で手数がかかるのである。昨今は人員削減のさなか、少ない人員で効率よくこれらの業務をこなすには、業務の省力化、すなわち電算化が最も適切であろう。

それでは、教官や学生等ユーザーにとってこの電算化は、どんなメリットがあるのだろうか。図書館業務の省力化のみであるとすれば、甚だ疑問である。つまりこゝで図書館が、従来の書籍や雑誌を提供する場から、情報をサービスする場への脱皮が望まれる。勿論、書籍や雑誌は貴重な情報である。然し、衛星通

信や光ファイバー等、高度な通信網が整備されるにつれ、刻々国内外の種々の情報（最近の研究記述・学位論文・特許・法律文書等、数えあげれば限りない。）が入手できる時代になってきている。また、これら膨大な情報源の中からユーザーが一番手に入れたいものを簡単に、迅速に検索できるとのことである。将来図書館がこんな姿になる時が来るであろう。さらには、視聴覚機器を通じての情報サービス（カセットテープ、VTRのフィルムなど）も将来の図書館に望みたい。

教育研究の場では、視聴覚教材の活用がはなはだ多い。幸い、教育学部には教育実践研究指導センターが設置され、これらの研究サービスを行っているが、私共がじかに接することの難かしい、著名な研究者による講演記録や、実験の様子あるいは国内外の芸術、歴史、地理、経済など、映像を活用することにより、私共が受けとる情報は活字のみから受けるものとは比べものにならないくらい大きなものがある。このようなサービスも将来の図書館に期待したい。

どうも愆が深くて期待ばかり並べてしまった。とにかく大学の図書館は教育研究の格式を象徴するものであれば、将来の図書館のあり方については、図書館関係者は申すまでもなく、教官・学生などユーザーがこぞって真剣に考えていかなければならない時であろう。

急進展する情報システムの中で

教育学部 講師 山西 潤 一

コンピュータ技術と通信技術の急進展によって、今、オフィスに、工場に、家庭に情報化の波が押しよせてきている。アルビントフラーの第3の波ではないが、その勢いの凄さと速さに、ただただ驚嘆するばかりである。

図書館もやがてこの波に洗われ、情報図書館へと変身していくことであろう。すでにその準備が始まっていると聞く。そこでは学術情報システムが機能し、多種多様な研究成果が迅速かつ的確に把握できるという。幸い、私のところでは、DIALOG というこのような情報検索システムの一つがすでに可動している。こんな内容の論文が探したいと、いくつかのキーワードを入れるだけで、たちどころに何十万件という膨大な数の論文の中から目的のものを探し出してくれる。タイトル、著者名、要約のついた最新の研究報告である。原論文が欲しければ、そこでそのままオーダーすると、約1週間でそれが送られてくる。この原論文の提供速度は富山大学図書館が現在実行しているサービス速度と同じである。

仄聞する処によれば、昭和60年始動予定の文部省の学術情報センタシステムは「当初は1次資料のみを提供する」らしい。ここに、このシステムの提供するサービスの質（格納1次資料の数とそれの提供速度）は現在よりも向上するはずである。

ここにおいてわが大学図書館に望みたいことは「DIALOGなどの2次情報提供機関と学術情報センターシステムとの間の良質なインターフェースの構成」である。

ところで、図書館の情報システム化もそうであろうが、このシステム化において、つねに人間とコンピュータのかかわりが問題となってくる。省力化のために入れたコンピュータに人間が振り回され、何のことはない、今まで以上にあくせく働かされていることになったりする。システム設計の不備から生じる典型的な問題である。システムが大規模になればなる程、もっと深刻な問題も起きてくる。

コンピュータの処理の速さによるものである。コンピュータは毎秒、何十万個というトランザクションを処理しており、人間がそれを監視するのは不可能である。ここでシステムに故障が生じた時、人間が手を打つ前に、その故障が関連するすべてのシステムに波及して、とり返しのつかない事故につながる恐れが生じたりする。人間が気づいて作動を停止する時間的余裕がないのである。すでに現実のものとなった事故がいくつか報告されているが、コンピュータシステム化の中で人間がどうかかわっていくか、今後、ますます考えなければならぬ問題である。

この人間とコンピュータの関係について東大の高橋秀俊先生が「人間八則」として面白い表現をされているので紹介しておこう。

1. 人間は気まぐれである。
2. 人間はなまけ者である。
3. 人間は不注意である。
4. 人間は根気がない。
5. 人間は単調を嫌う。
6. 人間はノロマである。
7. 人間は論理的思考力が弱い。
8. 人間は何をするのかわからない。

コンピュータの方から人間をながめたら、おそらくこう見えるのである。ということはコンピュータはこの裏返しに得意ということになる。人間とコンピュータとの関係をより円滑にしてより良いシステム設計を行うには、この両者の特質をどう利用するかである。安易にコンピュータに振り回されないようにしたいものである。

おわりに、情報とは英語の information の翻訳であることはだれしも御存じであろう。これは、一説によると、かの文豪森鷗外の訳といわれている。情けを報らせるということらしい。情報化の波の中で、ともすれば忘れられてしまう人間的行為が、いみじくも訳し出されているとは、さすがである。図書館の電算化に向けて関係各位の御努力が進んでいくと聞く。情けを報らせる図書館システムの実現を期待したい。

訪英雑記

人文学部 教授 長 沼 忠兵衛

私は今年8月末から10月初めまで、ロンドン大学歴史研究所で過ごす機会にめぐまれたが、そこはまことに居心地のよいところであった。その理由の一つは私の接した人たちの親切によるが、もう一つは私の研究にとっての便宜が整っていたことによると思われる。研究所の図書館は、テューダールームとか教会史ルームというように、閲覧室が部門別に分かれていて、こじんまりとしたそれぞれの部屋では、その部門の研究で身近におきたい書物等が手の届くところに備えられており、そこが私の主な仕事場となった。また近くにはロンドン大学図書館をはじめ蔵書数を世界に誇る英国図書館や公立記録保管所などがあって、研究所にない資料もそれらの施設で概ね手にすることができた。

ところで、身近におきたい資料が便利なかたちで身近にあり、且つあらゆる資料も近くにあるという二つの条件が同時に満たされるにはなかなか難しい問題が横たわっているように思う。というのは図書館は、一方において、多くの人びとの要求に応えるために出来る限り多くの書物をもつことを任務としているのに対し、他方では、利用する個人はそれぞれ自分の要求する資料が身近に、しかも便利なかたちであるよう求めるからである。私に関心をよせている17世紀イギリスのジョン・ロックも、1675年11月に訪れたフランスはリヨンのジェスイット派の学校の図書館の蔵書数の大きさに感嘆するけれども、他方で、立派なジェントルマンとなるために如何なる書物がよまれるべきかという問題に対しては、それ程多くの書物をあげていない。つまり目的によって基本図書は異なるのである。

なおこのときのロックの考えは興味深いものと思われるので簡単に紹介しておきたい。即ち、ジェントルマンにとって固有の仕事とは公務であるから、彼に求められる最も重要な知識は道徳と政治についての知識であり、

彼の職に直接関係ある勉学とは社会における善悪の問題と統治の技術をあつかう勉学である。しかしそれだけでは不十分であって、彼が読書の中で求めるべき目標には話す技術の向上ということも含まなければならない。こうしてロックは立派なジェントルマンになるための基本図書のリストを示すのであって、道徳と政治については、聖書、キケロ、フッカーそして自身の著書のほかティレル、ローリー、モルらの歴史や地理書・旅行記、さらに人間についての洞察をという見地から若干の文学作品をあげる。また話す技術をみがいてくれるものとしては、キケロらとともに同時代のティロットソン、チリングワースの書が薦められる。

ところで、話とはぶが、そこにみられるローリーの書物を私はロンドンで求めようとした。それは‘The History of the World’という、1614年の初版本以来何回も版が重ねられている著名な書物である。もちろん歴史研究所にはあった。1687年版でフォリオの堂々たるものであった。また英国図書館には各版本が揃っていることが目録でわかる。さて私は古本屋に入ってこういう書物はないかときいた。多くが「ない」と答えたが、ロンドンで最古といわれる書店ハチャーズの古書部ほか二三の古本屋のスタッフは、いずれもかなりの年配の人たちであったが、「それは1614年に初版がでていますが、求めているのはそれか」と尋ねかえしたのには感心した。書物についての並々ならぬ知識をうかがえたからである。そのとき私は、かつてのロンドンの古本屋のスタッフは、皆その長い経験から書物に対する深い愛着と蘊蓄をもっていたが、時代は変わりつつあると語った或る先輩のことはを思い出した。

図書館利用状況(昭和58年4月～9月)

区 分	入館者数	館 外 貸 出						参考業務 利用数	文 献 複 写 利 用 数			
		教 職 員		学 生		計			受 付		依 頼	
	人	人	冊	人	冊	人	冊	件	件	枚	件	枚
図書館本館	128,740	1,402	13,472	6,156	8,573	7,558	22,045	306	1,894	14,726	691	6,478
工学部分館	/	1,433	3,265	2,524	4,543	3,957	7,808	112	/	/	328	2,561
合 計	128,740	2,835	16,737	8,680	13,116	11,515	29,853	418	1,894	14,726	1,019	9,039

——図書館関係会議—— (昭和58年5月～昭和58年10月)

商 議 会

- 5月10日 第34回北信越地区国立大学図書館協議会について報告。電算化電算化委員，地図情報室小委員，館報編集委員の選出，その他について審議。
- 6月6日 国立大学図書館協議会について報告。
昭和58年度製本費，昭和58年度附属図書館運営費，昭和59年度概算要求(案)について審議。
- 7月18日 第30回国立大学図書館協議会総会，昭和58年度附属図書館運営費について報告。
昭和58年度学生用図書購入費，参考図書購入費，基本参考図書購入費について審議。

国立大学図書館協議会

- 第30回総会・6月9日～10日
・当番地区：北海道地区協議会
・会場館：北海道大学附属図書館
- 第1日目：総会，協議会賞受賞者表彰式，研究集会
- 第2日目：第1，2，3，分科会，全体会議

北信越地区国立大学図書館協議会

- 第34回
・4月21日～22日
・於新潟大学附属図書館 旭町分館
・協議題 国立大学図書館協議会事務局に提出する「当面の諸案件に対する地区の意見について」
昭和58年度理事及び地区連絡館の選出。
地区図書館職員研修会の研修課題について。

北信越地区国立大学図書館研修会

- 第33回
・9月30日
・当番館：新潟大学附属図書館
・講 演：「学術情報システムの大学図書館の対応について」
・講 師：文部省学術国際局 情報図書館課専門員 倉橋英逸
・協議題：図書館間の図書館資料相互貸借の制度化について

——図書館関係人事—— (昭和58年5月～昭和58年10月)

採 用

58. 9. 1 藤木弥三郎(閲覧係)
本田善彦(閲覧係)
58. 9. 20 中村喜久美(参考係)

併 任

58. 7. 13 工学部分館長 時沢 貢(工学部教授)(期間58. 7. 13～60. 7. 12)

職務命令

58. 10. 1 整理主任 結城 敏
閲覧主任 浜屋節子
参考主任 関場貞子

退職(辞職)

58. 7. 17 藤木弥三郎(閲覧係)
本田善彦(閲覧係)
58. 9. 30 吉岡泰博(参考係)

死 亡

58. 10. 23 野村幸弘(受入係)

電算化委員

- 若林嘉一郎図書館長(工)
山西潤一(附実)，小島 満(経)
田中専一郎(理)，八木 寛(工)
海老原直邦(養)，竹岡 環(図)

地図情報室小委員

- 若林嘉一郎図書館長(工)
神前進一(人)，藤森 勉(教)，小原久治(経)，井上 弘(理)，堀越 叡(理)，藤井昭二(養)，竹岡 環(図)。

館報編集委員

- 若林嘉一郎図書館長(工)
横山泰行(教)，小原久治(経)，
竹岡 環(図)